

「白露に風の吹きしく秋の野」の情景

——文屋朝康・後撰集三〇八番歌について——

成田大知

一、「吹きしく」

延喜御時、歌召しければ

白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける

文屋朝康

〔後撰集〕 秋中・三〇八

家説云。吹しくと云詞只吹と云斗にあらず。野の草を地に吹敷程の風といはん為なり。風強ゆへに露は皆落たるを断りたり。歌の心は秋の野の草に露置たるはさながら玉を敷たるやう也。

「吹しく」とは、「吹敷」であり、「風」が「野の草を地に吹敷程」に「吹」いていることである、と言う。

文屋朝康、『後撰和歌集』三〇八番歌。秋の美しい情景を詠んだこの歌は『百人一首』にも収録されて人口に膾炙しているが、その情景は、必ずしも十分には理解されていないようである。

例えば、第二句「風の吹きしく」。その解釈について、頓阿『百人一首諺解』は次のように言う。

また、『諺解』は続けて言う。「歌の心は秋の野の草に露置たるはさながら玉を敷たるやう也」。「秋の野の草」に「置いた「露」が、まるで「玉を敷た」ようだというのが、この「歌の心」であると。しかし、これでは「敷」をめぐって、「野の草を地に吹敷」と、「野の草」に「置いた「露」が「玉を敷たるやう」という、異なった解釈が並存すること

なり、明解ではない。

『諺解』は「風の吹きしく」を「野の草を地に吹敷程」と解するけれど、そうした解釈は成り立つてあろうか。「風の吹き敷く」と言っても、その目的語は明示されず、歌では「白露に」「風の吹きしく」と詠まれている。それを「野の草を地に吹敷く」と解することは難しいのではないか。

また『諺解』は、「秋の野の草に露置たるはさながら玉を敷たるやう也」とも言う。そのような解が成り立つためには、「火橋桁二燃付テ溪風火ヲ吹布タリ」（『太平記』巻第七・千劍破城軍事）のように、助詞は「を」を取って、「白露を風の吹きしく」とあるべきであらう。

また、「玉を敷たるやう也」というのは、「玉ぞ散りける」の結果であるはずであるが、それだと、詠出の順序と因果の順序とが逆転してしまうという憾みが残る。よって、「吹きしく」を「吹き敷く」と解することは不適切であると、言わざるを得ないであらう。²⁾

「白露に風の吹きしく」は、現在一般には、次のように解されている。

草の葉の上にいっぱいたまっている白露に、風が吹きし

きる秋の野は、ちようど緒に貫きとめてない玉がはららと散り乱れるやうで、いかにも美しい光景だことよ。

（島津忠夫訳注『角川日本古典文庫百人一首』）

白露に風が頻りに吹きあたる秋の野は、置ただけで貫き止めてない玉が散るように露が散り乱れていることであるよ。

（片桐洋一校注・訳『新日本古典文学大系後撰和歌集』）

「白露に風の吹きしく」とは、「白露に、風が吹きしきる」、「白露に風が頻りに吹きあたる」こと、つまり「白露」に「風」が「吹き頻く」ことと解されている。³⁾

「吹き頻く」であれば、語法上も問題はない。

しかし、ここに新たな問題が浮かび上がる。「風が吹きしきる」のであれば、「草の葉の上にいっぱいたまっている白露」が「はらはらと散り乱れる」ことはないのではないか。

何故なら、「草の葉の上にいっぱいたまっている白露」は「風」の一吹きで、散らされてしまうはずだからである。この「露」を、殆どの注釈書は「草の葉の上にいっぱいたまっている白露」、「置ただけで」と、草の上に置いた「露」と

解している。しかし、それは一度「散」らされてしまえば、それで終わってしまうであろう。

「風が吹きしきる」と言うこの歌の「白露」を、そうした「露」と考えてよいだろうか。

二、「白露」

この歌の「白露」について、現在の注釈の多くは、葉の上に置いた、結露と解している。

草葉に置いた白露が、秋風に吹き散る美しい光景を、白玉が散り乱れるさまに見立てた歌である。

(有吉保『講談社学術文庫 百人一首全訳註』)

色とりどりの草花に白露がいっぱい置いていて、秋風が吹きくるごとに、その白露が散り乱れてきらめく。

(窪田章一郎、杉谷寿郎、藤平春男編『鑑賞日本古典文学 古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集』、『後撰集』担当・杉谷寿郎)

「秋風が吹きくるごとに、その白露が散り乱れてきらめく。」
「風」に「散」らされる「白露」は何度も「散り乱れ」る。

しかし、この「白露」を「草葉に置いた」「露」と解した場合、そのような情景は成立しないのではないか。

「草葉に置いた白露」、すなわち結露は一度「散」ってしまえば、それで終わってしまう。それは次の例においても明らかである。

すこし日たけぬれば、萩などのいとおもげなるに、露のおつるに、枝うちうごきて、人も手ふれぬに、ふと上ぎまへあがりたるも、いみじうをかし。∴

(『清少納言枕草子』「九月ばかり、夜ひと夜ふりあかしつる雨の」の段)

御簾少し上げたまへるに、前近き透垣のつらなる萩の下葉の、露にいたう乱れて折れ返りたる、吹き越す木枯に、はらはらと落つる露の白玉、∴ (『狭衣物語』巻第三)

「露」の重さに「萩など」の枝が撓んで「露」がこぼれ「落」ちる。すると、枝は上に返る。「萩」も「露」に「乱れ

て折れ返り、「露」はそれを「吹き越す木枯」に「はらはらと」「落」ちる。これらの葉の上に「露」は残っていない。そこに「露」がすぐに結ぶこともあり得ないだろう。したがって、「吹きしく」「風」に「露」が「散り乱れ」ることもないはずである。この歌の「白露」を「草葉に置いた」「露」などと考えることはできないであろう。

とすれば、吹きしきる「風」に何度も「散り乱れ」る「露」とは、どのような「露」か。それは「雨露」ではないだろうか。「雨露」ならば、雨が降り続けている限り、葉の上に「露」が溜まる。

「雨露」も「露」と言ったことは次の歌に明らかである。

秋のうたとてよめる

在原元方

雨ふれど露ももらじを笠取の山はいかでもみちそめけむ
 (『古今集』秋下・二六一)

雨が降っても「露」が漏れないと言う。「雨ふれど」と言うことからすれば、この歌の「露」は、草の葉に結ぶ「露」ではなくて、降る雨の「雨露」であろう。⁽⁵⁾『後撰集』三〇八番歌の「白露」も、「雨露」であったと考えるべきではないか。

絶え間なく吹く「風」に「白露」が幾度も「散り得る」は、「白露」がまさに今降っている雨の「露」だからであろう。結露では、そうはなり得ない。とすれば、『後撰集』三〇八番歌にあつては、「風」が「吹きしく」上に、雨が降り続いていたことになる。

三、「白露に風の吹きしく」

「白露に風の吹きしく」。この「白露」が「雨露」であつたとして、それに「吹きしく」「風」とは、どのような「風」であつたのか。それには『後撰集』三〇八番歌の詠む時季が参考となる。

所収の『後撰集』秋部の排列については、次のような指摘がある。

秋部の上中下の三巻がほぼ七、八、九月の三箇月に相当し、しかもその景物、行事はおおむね日次を追って排列されている。すなわち、月次・日次排列を意図し構成され、まゝ「九月尽」で終る排列法を継承したものといえよう。

(杉谷寿郎『後撰和歌集研究』)

これによるならば、秋中に排されるこの歌は、仲秋八月の情景を詠んだ歌ということになる。さらに言えば、この歌が「八月なかの十日許に」(二九四番歌詞書)と「八月十五日夜」(三二五番歌詞書)との間にあることからすれば、より具体的には、八月十日頃から八月十五日の間の歌と位置付けられる。

その頃の、「雨」の「露」に「吹きしく」「風」と言えば、それは「野分」の「風」であろう。

「野分」は典型的には八月のものである。

稿者がかつて、『源氏物語』桐壺卷、野分の段の時季を考察した。

「野分だちて、にはかに膚寒き夕暮のほど、…」と始まる野分の段。ここに書かれる「膚寒し」という季感は、曾禰好忠『毎月集』の、

膚寒く風は夜ごとになりまさる我が見し人は訪れもせず

(秋八月中・二三三)

という歌を参考にすれば、「八月中」、すなわち八月中旬のものということになる。「野分だちて」と言われる桐壺卷の「野分」は、八月のものと考えられる。

その他、『源氏物語』における「野分」の例は、「八月、野分荒かりし年、…」(蓬生卷)、「八月は故前坊の御忌月なれば、…野分、例の年よりもおどろおどろしく、…」(野分卷)、「八月」十四日に亡せたまひて、これは十五日の暁なりけり。…風野分だちて吹く夕暮に、…」(御法卷)と、いずれも八月である。「野分」と言えば、それは八月のものであったのである(拙稿「物語の現実感―源氏物語の世界構築について―」『成城国文学』第三十四号)。

『後撰集』において、八月中旬に位置付けられる、この三〇八番歌に詠まれる「吹きしく」「風」も、「野分」の「風」であったと考えるのが相応しいと言えるであろう。

「野分」であれば、それは当然、雨を伴う。「暴風 史記云、暴風雷雨。漢語抄云、波夜知、又能和歧乃加世」(『箋注倭名類聚抄』)。降り続ける「雨」の「露」と、それを「吹き」「散」らす激しい「風」。これらを両立させ得るものは「野分」をおいて他に無い。

この歌が八月「野分」の情景を詠むものであることは、こ

の歌の影響下に成ったであらう、その名も「野分」と言う、『源氏物語』野分巻の叙述によっても、確認することができる。

…八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなくおぼしつつけ暮るるに、…野分、例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。花どものしをるるを、いとさしも思ひしまぬ人だに、あなわりなと思ひ騒がるるを、まして、草むらの露の玉の緒乱るるままに、御心まどひもしぬべくおぼしたり。…

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひけるをりにしも、かく吹き出でて、もとあらの小萩、はしたなく待ちえたる風のけしきなり。折れ返り、露もとまるまじく吹き散らすを、すこし端近くて見たまふ。

夕霧が野分の見舞いに、紫の上の住む六条院、南の御殿を訪ねる条。時季は『後撰集』三〇八番歌と同じ八月。「草むらの露の玉の緒乱るるままに」の引歌として、『岷江入楚』はこの「後撰集」三〇八番歌を挙げている。「野分」の「風」が「草むらの露の玉の緒乱るるままに」散らし、「もとあ

の小萩」の枝を「折」って「露もとまるまじく吹き散らす」。これはまさに三〇八番歌の情景に通う。

野分巻の右の条の後には、「暁がたに風すこししめりて、村雨のやうに降り出づ」と、雨の降ることが書かれている。

とすれば、溯って三〇八番歌の「露」と「風」、それらも「野分」の「雨露」と「風」であったと考えられるであろう。

「野分」によつてもたらされる激しい「雨」と「風」。降りしきる「雨」が葉に降り置いて「露」となる。雨露が置くや否や、それを「風」が吹き散らす。「風」にさらわれた「露」が野に飛び「散」る光景はまさに「玉」の「散」るようであらう。三〇八番歌の描く情景は、このような情景であったのではないか。

『後撰集』三〇八番歌の情景、それは「野分」の激しい「風」と「雨」によつて作り出された情景だったと考えられるのである。

四、「玉」

「野分」の風雨が生み出す情景を、『後撰集』三〇八番歌は「つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」と詠んでいた。

「野分」の「風」に「散」らされる「雨露」がここでは、「玉」に譬えられている。

その「玉」とは、どのようなものか。

「玉」は白玉のことで、古代は多く真珠を言ったようである。（島津忠夫訳注『角川日本古典文庫 百人一首』）

玉というのは、だいたいこの時代真珠ですね。

（井上宗雄『古典ルネッサンス 百人一首』）

「貫きとめぬ玉」は、糸で貫いてつないでいない宝石や真珠の玉。

（新撰万葉集研究会編『新撰万葉集注釈』巻上（二）、担当・朱秋而・山本登朗）

諸書の言うように、この「玉」は「真珠」なのであろうか。『後撰集』三〇八番歌と同様、水滴が飛び散る情景を「白玉」が「散」るのに擬えて詠んだ歌が『伊勢物語』に見える。

ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくも散るか袖のせば

きに

（八十七段）

八十七段、「蘆屋の里」布引の滝遊覧の業平一行。「さる滝の上」に、わらうだの大きさとして、さしいでたる石あり。その石のうへに走りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つるのを見て、「あるじ」業平が詠んだ歌である。ここでは、滝の飛沫が「白玉」に譬えられている。

『後撰集』三〇八番歌に比較するならば、「ぬき乱る」と「貫きとめぬ」、「白玉のまなくも散るか」と「玉ぞ散りける」とがそれぞれ類似する。特に「白玉のまなくも散るか」は、「吹きしく」「風」に絶え間なく「雨露」が「散」る情景に通じる。あるいは、『後撰集』三〇八番歌はこの歌に影響を受けているのかもしれない^⑩。

この歌について、肖柏『伊勢物語肖聞抄』は言う。

心は、此滝のしら玉をみだすやうにこぼれおつるをみて、ぬきみだる人こそあるらし、と云也。たとへば、水精な^⑪どの糸にぬきたるを、糸をぬきてみだしたるやうなれば、かく云り。

「白玉」とは、「水精（晶）」だと言う。そして、飛瀑の激しさを「水精などの糸にぬきたるを、糸をぬきみてみだしたるやう」とする。¹²⁾

「白玉」は「水晶」のこともあった。

Xirātama シラタマ（白玉）…また、白い宝石、または、水晶、
（土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』）

とするならば、趣を同じくする『後撰集』三〇八番歌の「玉」も「水晶」と考えられるのではないか。

天理図書館蔵『百人一首聞書』にも、次のようにある。

心は、白露を風の頻に吹は、水晶の玉の緒を切て散らす
がごとく也と云心也。

他にも『百人一首』の古注には、『聞書』のように、三〇八番歌の「玉」を「水晶などの珠」、「水晶の玉」と解するものがある。

又、枝に結ぶ白露は、水晶などの珠をつらぬきたるやうに見えしも、…
（頓阿『百人一首諺解』）

…草木の露はらはらと散乱たるは、糸にて貫たる水晶の玉をぬき乱したるやうなると也。
（『百人一首切臨抄』）

三〇八番歌の「玉」も「水晶」と考えるべきなのではないか。

と言うのも、「水精などの糸にぬきたる」や「水晶などの珠をつらぬきたる」、「糸にて貫たる水晶の玉」には、具体的な実例があったことが考えられるからである。

中井履軒『百首贅言』は次のように言う。

露ヲ玉ニタトヘタル歌多シ。皆水晶ノ念珠ナルヲ、明カニ言タル註解ハ古ヨリナキハ何故ゾヤ。玉ハ円ナラヌモアリ。赤キモ青キモ又緒ヲヌカヌモアレバ、外ノ玉ハ喩ニ力ナシ。又念珠ハ白ノミナラズ其数多シ。露ノ喩切ナリ。外ノ玉ハ然ラズ。故ニ露ニ喩ルハ水晶ニ限ルベシ。

「水晶ノ念珠」とは、すなわち「水晶」で成る数珠である。

「水精などの糸にぬきたる」、「水晶などの珠をつらぬきたる」、「糸にて貫たる水晶の玉」とは、具体的には「水晶の数珠」を想起すべきなのではないだろうか¹³。

「水晶の数珠」は、『清少納言枕草子』や『とほずがたり』にも見えている。

あてなるもの　うす色にしらかさねの汗衫。かりのこ。
削り水にあまづらわいて、あたらしき金腕にいれたる。

水晶の数珠。…（「あてなるもの」の段）

五七日にもなりぬれば、水晶の数珠、女郎花の打枝につけて、諷誦にとて賜ふ。（卷一）

東寺や東京国立博物館には、平安時代の「水晶の数珠」の実例も伝存している¹⁴。

これに対して、「真珠の数珠」というものは存在したのだろうか。

「国内に現存する古代（奈良・平安時代）の伝世数珠に対し、考古学的手法を用いて検討」した秋山浩三氏に興味深い報告がある。

奈良・平安時代総体では、伝世数珠（秋山注略）には、

コハク、水晶、植物質、ガラスの順に用いられていた。出土珠玉（秋山注略）においてはガラスが突出していたにもかかわらず、伝世数珠ではガラスはあまり多くはなく、また、滑石は数珠には全く用いられていない。この点から、当時、一般的に多用（生産・消費）されていた珠玉を使って、珠玉が製作されたのではなく、数珠用に材種が選定されていたことが推定できる。とりわけ、数珠にはコハクおよび水晶が意図的に選ばれていた蓋然性が高い。

（「古代伝世数珠考」森郁夫先生還暦記念論文集刊行会『瓦衣千年—森郁夫先生還暦記念論文集—』）

古代、「数珠にはコハクおよび水晶が意図的に選ばれていた蓋然性が高い」と言う。恐らく、真珠の数珠というものは存在していなかったと考えられる。同論文所載の「伝世数珠の珠材種」（平安）、「近畿出土の玉類（有孔珠玉）の材種」（平安）を示した表においても、「動物質（真珠・サンゴ）」の珠数は0となっている¹⁵。

『後撰集』三〇八番歌「つらぬきとめぬ玉」、『伊勢物語』

八十七段「ぬき乱る…白玉」において想起すべきは、「水晶の数珠」であったと考えられる。⁽¹⁶⁾

次の二首なども、「水晶の数珠」を念頭に詠まれたものと思われる。

是貞のみこの家の歌合によめる⁽¹⁷⁾ 文屋朝康

秋の野に置く白露は玉なれやつらぬきかくる蜘蛛の糸すぢ
〔古今集〕秋上・二二五

延喜御時、歌めしければ 紀貫之

秋の野の草は糸とも見えなくに置く白露を玉とぬくらむ
〔後撰集〕秋中・三〇七

「白露」を「玉」に見立て、「草」や「蜘蛛の糸」がそれを「つらぬ」く、あるいは「ぬく」のを詠む。これらの発想のもとなつたのも、水晶の数珠であったと考えられる。⁽¹⁸⁾

特に「古今集」二二五番歌は、「後撰集」三〇八番歌と同じ文屋朝康のものである。これらは同じ発想で詠まれたのではないだろうか。⁽²⁰⁾

但し、「古今集」二二五番歌は、「蜘蛛の糸すぢ」を「玉」

を「つらぬ」く糸に見立てて、静かな情景を詠むに止まり、特に動きを詠まない。

一方、「後撰集」三〇八番歌「つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」とは、「水晶の数珠」の緒が切れて、小さな「水晶」の「玉」が飛び散るように、「野分」の激しい「風」に「雨露」が「散」る情景を描き出す。そのような激しい動きのある情景を詠んだものとして、この歌は、「古今集」二二五番とは一線を画するものだったのである。⁽²¹⁾

五、「つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」

結句、「つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」。「水晶の数珠」の玉が散るように雨露が散る情景とは、どのようなものであったのか。

前述の『伊勢物語』八十七段業平の歌を念頭に詠まれた歌が、『采花物語』布引の滝巻にある。

中将公実

世とともにこや山姫の晒すなる白玉割れぬ布引の滝

承保三年（一〇七六）秋、藤原師実一行は布引の滝見物に訪れた。一行が目にした滝は、「業平がひび続けたる様にぞありけむかし」、まさに『伊勢物語』八十七段に書かれる様であった、と言う。

八十七段の「白玉」が「水晶」であったとするならば、この歌の「白玉」も「水晶」ということになる²³。それをこの歌は「割れぬ」と詠んで、滝の飛沫を「水晶」の「割れ」て飛び散る様に譬えている。

「水晶」が「割れ」るように「水の散」る情景は、『清少納言枕草子』にも書かれていた。

月のいとあかきに、川をわたれば、牛のあゆむままに、水晶などのわれたるやうに、水のちりたるこそをかしかれ。
 （『月のいとあかき』の段）

川を渡る牛の歩みに飛び散る水の雫を「水晶などのわれたるやう」と記している。牛が歩くたびに「水晶などのわれたるやうに」川の水は散る。「月のいとあかき」夜であることからすれば、飛び散る水は月の光を受けて輝いていたことだろう。水しぶきが燦然と煌めきながら散る様が想像される。

「白玉割れぬ」、あるいは「牛のあゆむままに、水晶などのわれたるやう」と言う、水滴が飛び散る情景は、『後撰集』三〇八番歌の「風」に「吹」かれた「白露」が、「つらぬきとめぬ玉」のように「散」る情景に通じるであろう。

『清少納言枕草子』に似た情景は、『更級日記』にも書かれていた。

十月ばかりに詣づるに、道のほど山のけしき、このころは、いみじうぞまさるものなりける。山の端、錦をひろげたるやうなり。たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわきかへるなど、いづれにもすぐれたり。

「たぎりて流れゆく水」、すなわち湧き立つように流れてゆく水が「水晶を散らすやう」だと言う。湧き立つては流れてゆく水の飛沫が「水晶」の粒を「散」らすように見えたのだらう。

「白玉のまなくも散る」（『伊勢物語』八十七段）、「水晶などのわれたるやうに、水のちりたる」（『清少納言枕草子』）「月のいとあかき」の段、「たぎりて流れゆく水、水晶を散らすやうにわきかへる」（『更級日記』）。「水晶」の「散」

る様がいかに印象的であったかが窺われる。「白玉割れぬ」(『栄花物語』布引の滝巻)の「白玉」も「水晶」の玉であったに違いない。

「水晶」は『本草綱目』に「色澈如_レ泉清明而瑩。置_二水中_一無_レ取不_レ見_レ珠者佳」(金石部・玉類)と言われるように、水のように透き通っている。

この阿字をあきらかに観ずるときには、六根のもろもろの垢、みなすべて清浄になりぬ。六根純浄にして無垢なるがゆへに、心性もまた、垢なし。なをし水精と淨月とのごとし。
(藤田美術館蔵『阿字義』)

その透明さから、「清浄」、「無垢」の譬えとなる「水晶」。透明で光り輝くもの、それが「水晶」の美しさなのである。この点が「真珠」とは異なっている。「故_二露_一ニ喩ルハ水晶ニ限ルベシ」(『百首贅言』)、ということになるのであろう。

「風」に「散」らされる「露」、あるいは激しい滝の飛沫、あるいは歩む度に飛び「散」る川の水の飛沫、あるいは激しい水の流れ。これらの水の雫が、日の光を反射して煌めきながら飛び「散」る情景は、まさに「水晶」の玉が飛び散るよ

うに見えたことだろう。「水晶」が水のように「透過」ったものであるからこそ、「露」などの水の雫が「水晶」に譬えられたのだと考える。

『後撰集』三〇八番歌以前にも、「露」を「玉」に見立てて詠んだ歌は存在した。しかし、それらの多くは、葉の上に置いた「露」を詠んだものであって、動きの無い静かな情景であった。それらに対して、葉の上に降り置く「雨露」を、しかもそれが、「野分」の「風」に「水晶」の「玉」のごとく透明に煌めきながら「散」る動的な情景を詠んだ三〇八番歌は、それまでの類型的な表現を脱した、画期的で新鮮な感覚の歌だったのである。

「白露に風の吹きしく秋の野」の情景。それは、八月、「野分」の雨露が葉に降り置いたそばから、あたかも「水晶」の数珠の「玉」が散るように、「野分」の「風」に散らされるという、「雨」「風」ともに激しい動きのある印象鮮やかな情景なのであった。

注

本文の引用は以下の通り。和歌(物語中の和歌は除く)——『新編国歌大観』、『百人一首』古注釈——『百人一首注釈書叢』

刊』、『伊勢物語』『源氏物語』『更級日記』——『新潮日本古典集成』、『狭衣物語』『とはすがたり』——『新編日本古典文学全集』、『栄花物語』『太平記』——『日本古典文学大系』、『清少納言枕草子』——『新日本古典文学大系』、『伊勢物語』、『伊勢物語古注釈書コレクション』、『箋注倭名類聚抄』——『諸本集成倭名類聚抄本文篇』、『本草綱目』——『万曆十八年（一五九〇）刊』、『本草綱目』（国立国会図書館デジタルコレクション）、『阿字義』——『続日本絵巻大成』。便宜、表記を換えた箇所がある。

(1) 引用和歌の歌番号は『新編国歌大観』による。

(2) したがって、初句を「白露を」に作る本文（小汀利得氏蔵本、宮内庁書陵部蔵家仁親王自筆奥書本）、第二句「風の吹きしく」を「風の吹敷」と表記する本文（高松宮家蔵藤原定家筆臨摸本、日本大学図書館蔵冷泉為相筆本、小汀利得氏蔵本、宮内庁書陵部蔵家仁親王自筆奥書本（小松茂美『後撰和歌集校本と研究』）には従えない。なお、この歌を収録する『新撰万葉集』も本文を「風の吹敷」とするが、「敷」の文字は、本集では意味にかかわりなく、「しき」「しく」「しけ」の表記に用いられている」と言われる（『新撰万葉集研究会編』『新撰万葉集注釈』巻上（二）、担当…朱秋而・山本登朗）。

なお、十巻本「寛平御時后宮歌合」では、第四句が「つらととのほぬ」となっている（萩谷朴『新訂増補平安朝歌合大成』）。恐らくこれは「列整はぬ」であって、「露」がつらなりの乱れた玉のように散る、という理解から生じた本文であろう。

また、『後撰集』の詞書「延喜の御時、歌召しければ」について、吉海直人『百人一首の新研究 定家の再解釈論』は、延喜以前に成立した「寛平御時后宮歌合」にこの歌がすでに見られることから、「延喜の御時」の「歌召し」で詠まれた歌だとする『後撰集』の詞書は誤っているようにであると指摘するが、

徳原茂美『古今和歌集の遠景』の言うように、詞書の「歌召し」は新詠のみを奉らせたのではなく、延喜以前の旧詠の献上も許されていたものと考えられる。

(3) 「秋の野に落満たる露の面白きに俄なる風の荒く吹て……（百人一首切臨抄）、「つらぬきとめて見度おもへと俄に風荒く吹しく露の玉なれば……」（百人一首師説抄）と、「風の吹きしく」を突風と考えている解釈もあるが、「吹きしく」にそのような語義は認められない。

(4) 他にも例えば、『源氏物語』帯木巻、雨夜の品定めの際における左馬の頭の言、

「……御心のままに、折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなむと見ゆる玉笹の上の敷などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそ、をかくおほさるらめ、……」

男に靡きやすい艶な女を「折らば落ちぬべき萩の露」に譬える。これは『古今集』の、

折りて見ば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわわにおける白露

（秋上・二二三）

に拠るとされる（『河海抄』）。いずれも、「白露」の「落ち」た葉に「露」がすぐに結ぶことはない。

(5) 以下の「露」は「雨」の雫ではあるが、「雨」が上がった後に残る、余滴である。

五十首歌たてまつりし時

寂蓮法師

村雨の露もまだひぬ槇の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

（『新古今集』秋下・四九二）

暮らし明かして、格子などあぐるに、見出だしたれば、夜、雨の降りける気色にて、木ども露かかりたり。
〔蜻蛉日記〕天禄元年五月十日条、〔新編日本古典文学全集〕

秋の雨いと静かに降りて、御前の前栽の色々乱れたる露のしげさに、……
〔源氏物語〕薄雲卷

余滴も結露同様、一度、葉から散って落ちてしまえば、無くなってしまふ。〔後撰集〕三〇八番歌の「白露」を雨後の余滴と考えることも難しいであろう。

(6) この歌の情景について、吉海直人氏は「この歌は秋上巻ではなく秋中巻に配されている。そうすると『後撰集』の解釈としては、草花の咲き乱れる初秋の野原ではなくて、既に花は大方枯れてしまっている荒涼とした情景ということになってくる」と言う(前掲書)。しかし「荒涼とした情景」とは晩秋九月、『後撰集』で言えば、秋下巻の情景であろう。むしろ仲秋八月は、草は青々しく、繁茂する時季である(拙稿「物語の現実感―源氏物語の世界構築について―」『成城国文学』第三十四号)。

(7) 「一晩じゆう吹き荒れた野分の結果やいかにと、外に出てみた」(高橋陸郎「百人一首恋する宮廷」)、「野分の朝であるう」(白洲正子「私の百人一首」)、「風が吹きしく」とは、野分か、それに近い強風であろう(鈴木日出男「ちくま文庫 百人一首」)、「第二句の「風の吹きしく」は、頻りに吹く風で、荒く強い野分の風などを思わせ、……」(窪田章一郎「百人一首鑑賞」という指摘もあるが、いずれも、「白露」が「雨露」であるとは明言しない。但し、白洲正子「私の百人一首」は「野分の朝」としており、「白露」を「野分」の雨の上があった後の余滴と考えている蓋然性がある。しかし、『後撰集』三〇八番歌

の「白露」を雨後の余滴とは考え難いことは、注(5)に述べた通りである。

(8) 窪田章一郎氏はこの歌の情景について、「秋の野の露の美しさを詠んでいるが、露がこぼれ落ちるというような静かな情景ではなく、強く動的に詠んでいるところに特色のある歌である」と言う(前掲書)。但し、氏は「動的」な情景の要因となる「風」については「荒く強い野分の風などを思わせ、……」と言うものの、「白露」は「草の葉に置く白露」としている。

(9) 「伊勢物語」六段にも、「白玉」を詠み込んだ歌を見ることができる。

白玉か何ぞと人の問ひしとき露とこたへて消えなましものを

「芥川」や「鬼一口」の名で知られる六段。周知の通り、「男」との逃避の道行、二条の后と目される「女」が「草のうへに置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問うたことを受けて、「男」が詠んだ歌である。この「白玉」について、「白玉」は「真珠」(鈴木日出男「伊勢物語評解」)、「真珠かしら何ですか」とあの人がたずねたとき、……(阿部俊子「講談社学術文庫 伊勢物語全訳注(上)」)、「真珠? あれは、なあに」とあなたが尋ねた時、……(俵万智「恋する伊勢物語」) などとするものもあるが、その根拠は示されない。

(10) 「古今和歌集目録」に、「康秀男。寛平四年正月廿三日任駿河掾。延喜三年二月廿三日任大舍人大允」(『群書類従』)とあることから、朝康は、「寛平」、「延喜」の頃の人と思われる。さすれば、「散」る水滴という似た情景を詠む「伊勢物語」八十七段の業平の歌に、『後撰集』三〇八番歌が影響を受けた蓋然性は大きい。いずれにしても、「散」る水滴に着眼して、それを「白玉のまなくも散るか」と詠んだ業平の創意には称賛すべきものがある。

(11) 古代、「水晶」は普通「水精」に作る。「水晶」は比較的新しい用字であつたらしい。このことについては、吉野政治『日本鉱物文化語彙考』に詳しい。

(12) 「澆のしぶきを真珠の輝きと見立てて、自分の袖が狭いのでそれを受けとめきれない」とした歌である」(鈴木日出男『伊勢物語評解』)という理解もあるが、水滴が光を反射しつ飛び散る様は、「真珠」より「水晶」の方が相応しいのではないか。

(13) 都良香「富士山記」(『本朝文粹』巻第十二)にも、

承和年中、從「山峰」落來珠玉、玉有「小孔」。蓋は仙簾之貫珠也。
(『新日本古典文学大系』)

とある。ここでは「玉」は、「仙簾之貫珠」とされている。

(14) 東寺蔵の数珠は「平安時代(十二世紀)」のもので、「寺伝では空海所用と伝えられている」(京都国立博物館他編『創建一二〇〇年記念「東寺国玉展」図録』、図1)。一方、東京国立博物館蔵の数珠は、平安時代後期のもので、「水晶と菩提樹、ガラスからできている」(『和樂』二〇〇二年十月号、図2)。また、正倉院には、平安時代以前の「水精誦数」も現存しており、南倉に五点納められている(宮内庁蔵版『正倉院事務所編『正倉院宝物7南倉1』)。

川端康成も、「京都の古美術商」に「直径が一センチほどの大きさ」の玉で成る鎌倉時代の「水晶の数珠」を、また別の古美術商には「そろばん玉のように平べったく、それも中国のそろばん玉のように角が円い」玉で成る平安時代の「水晶の数珠」を見せてもらったことを、随筆「水晶の数珠など」(『川端康成全集』第十五巻)に書いている。



図1：東寺所蔵
「水晶の数珠」



図2：東京国立博物館所蔵
「水晶の数珠」

(15) 一方、「真珠」は、「法華経」や『無量寿経』において、「七宝」(「七珍」)とも)のひとつとして現存する天平時代の宝物に用いられていた例がある。「これらの真珠が、天皇の冠や仏像の冠、鎮壇具や正倉院宝物を飾るなどの点から、貴重な宝物として珍重されたことがうかがわれる」(森豊『シルクロードの真珠』)。仏教のみならず、伊勢神宮の「皇大神宮御料」にも、「真珠」が確認できる(奈良国立博物館編『特別展古神宝―神々にささげた工芸の美―』解説目録、図3)。「真



図3：伊勢神宮所蔵
「皇大神宮御料」の「真珠」

珠」は神宝でもあった。但し、「日本の古代人が真珠を貴重なものとして歌によんだからといって、その後平安・鎌倉から江戸時代の人々の装身具に、真珠をはじめ宝石が一般に用いられた話はきいたことがない。真珠の宝石としての価値が再認識されたのも明治以後のことである」（小栗宏『東洋の宝石・真珠』）。ルイス・フロイスの記録にも、「われわれの間では真珠と小粒の真珠とは装身のためにつかう。日本では薬を作るために搗き砕くより外には使われない」（ルイス・フロイス／岡田章雄訳注『岩波文庫 ヨーロッパ文化と日本文化』）とある。これについて、岡田章雄氏は、「当時わが国ではふつう真珠を砕いて薬用に用いた。その効能は、『倭漢三才図会』（巻第四十七介貝部）真珠の項によれば、厥陰肝経に入る。故によく魂を安定し、魄を定め、目を明らかにし、聾を治す、という。精神安定剤として用いられたのである」と言う。

（16）日本には「真珠の数珠」は存在しなかったと思われるが、買島の詩「贈円上人」（『全唐詩』）に、「百八真珠」という語が見える。

贈円上人

誦経千紙得_レ為_レ僧 塵尾持行不_レ払_レ蠅

古塔月高聞_レ呪水 新壇日午見_レ燒燈

一双童子澆_レ紅藥 百八真珠貫_レ綵繩

且說近來心裏事 仇讎相對似_レ親朋

「百八真珠」とは、数珠の珠数が「百八煩惱を除く意から百八個」（石田瑞磨『仏教語大辞典』）とされていることから、「真珠の数珠」と考えられる。仏典では、宝思惟釈『校量数珠功德経』に「若用真珠珊瑚等為数珠者。誦招一遍得福百倍」（SAT大正新脩大藏経データベース二〇一八年版）とあって、「真珠珊瑚等為数珠」の功德の大きさが説かれているが、管見の限り、他に「真珠の数珠」の例を見出すことはできない。因みに、仁和寺の宝蔵には、宇多法皇の御物の「人骨之誦珠」というものがあつたようである。

是去年本寺焼亡之夜念取出之間、寛平法皇御物成_二散々_一也。仍如_レ元被_二納置_一也。其中誦珠甚多、而人骨之誦珠一_レ連見_レ之。依_二何事_一有_二此誦珠_一哉。甚以不審也。此事_レ逢_レ僧可_二尋知_一也。

（藤原宗忠『中右記』保安元年（一一二〇）四月廿四日条、
『史料大成』）

菅原文時『仁和寺御室御物実録』にも、「人骨平咒珠壹連_{同裝束}

納黒漆筥一合有籬立」(「尊経閣叢刊」複製)と記されている。

(17) 詞書の「是貞のみこの家の歌合」と目される二十卷本「仁和二宮歌合」に、この歌は見えない。この歌を含む「古今集及び後撰集」に、是貞親王家歌合の歌としてある所の十八首及び五首の中で、この本文に見ゆるものは僅か五首及び三首あるに過ぎず、その他の歌は見えてゐない(堀部正一「類聚歌合とその研究」。「是貞親王家歌合といふにも数度あつたのか、或はこの和歌合抄のよつたものが既に残缺本であつたのか」(堀部同書)、問題が残る)。

(18) 良庵の発句にも、

すず玉はみな水晶やけさの露

(「鷹筑波」、『俳書大系 貞門俳諧集 上巻』)

とある。

(19) 雅経本「ふんやのやすひて」、天理本「ふむやのやすひて」。但し、天理本は「やす」の上に「あさ」を挿入、「ひて」を見せ消ち(久曾神昇「古今和歌集成立論」)。だが、作者を朝康とする本文が圧倒的であり、それらに従う。

(20) 金子元臣「古今和歌集評釈 昭和新版」も、この歌の大意を「この秋の野に置く白露は、恰も玉と見える、あ、いかにも玉であるかして、まことの数珠のやうに繋ぎかける事よ、蜘蛛の糸筋が」とする。しかし、「水晶の数珠」とは限定しない。また、「露」を「玉」に、「ささがに」の「糸」、すなわち「蜘蛛」の「糸」を「玉を貫く糸」に見立てるものは「古今集」や「清少納言枕草子」、『後拾遺集』などにも見える。

をみなへし

白露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし

(「古今集」物名・四三七)

友則

九月ばかり、夜ひと夜ふりあかしつる雨の、けさはやみて、

朝日いとけざやかにさしいでたるに、前萩の露は、こぼるばかりぬれかかりたるも、いとをかし。透垣の羅紋、軒のうへなどは、かいたる蜘蛛の巣の、こぼれのこりたるに、雨のかかりたるが、白き玉をつらぬきたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

(「九月ばかり、夜ひと夜ふりあかしつる雨の」の段)

題知らず

藤原長能

ささがにの巢がく浅茅の末ごとくに乱れてぬける白露の玉

(「後拾遺集」秋上・三〇六)

この「白き玉を貫きたるやう」、「白露を玉にぬく」、「ぬける白露の玉」と言うのは、『古今集』二二五番歌のように「水晶の数珠」による発想なのではないか。

(21) 「数珠を切る」という表現には、仏の戒めを破る、改宗するという意味があつた(『日本国語大辞典 第二版』)。

法花「あそこの隅でもこの隅でも、黒豆を数へ、ぐどぐどと願おふよりも、そなた、其数珠を切つて法華にならせませ」(「狂言記」「宗論」、『新日本古典文学大系』)

此一宗をすすめまはりしに、いづれの出家も数珠切らざるはなし。

(22) 「水晶の数珠」が切れると言へば、滝沢馬琴「南総里見八犬伝」が想起されよう。

(姫は)護身刀を引抜て、腹へぐさと突立て、真一字に搔切給へば、あやしむべし瘡口より、一朵の白気閃き出、襟

に掛させ給ひたる、彼水晶の珠数をつつみて虚空なからにのぼる見えし。珠数は忽たちまち地弗あつちと断き離れて、その一百は連ねしままに、地上へ憂うれと落とどまり、空に遺れる八の珠は、粲然として光明あかりをはなち、飛遶り入ま紊れて、赫奕あざたる光景は、流るる星に異ならず。(第二輯卷之二、『有朋堂文庫』)

父里見義実の飼犬、八房の子を宿したという疑念を晴らすべく伏姫が割腹する場面。この「珠数」は、作中、「これに由てか彼白玉に、孝の字あるも、寔に奇也」(第二輯卷之五)と言われることから、「水晶の数珠」であろう。姫が腹を切ると、「瘡口より、一朵の白気閃き出」て姫の首の数珠を包んで空に上った。百の「珠」は地に落ちて、残りの「仁義礼智忠信孝悌」の字が浮かんだ「八の珠」は「赫奕」として宙を「飛遶り入紊れ」た。数珠の素材が煌めく「水晶」であるからこそ、「赫奕」と描写されるのであろう。この場面が何を典拠とするのか不明であるが、『後撰集』三〇八番歌の「つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」に通じる描写である。

また、落ちる「涙」を「水晶の数珠の切れたることく」と描写したものが、近松門左衛門『用明天王職人鑑』に見える。

夫婦目と目を見合せて、叫びあげ咽び入り、袖にも膝にもはらはらと落つる。涙は水晶の数珠の切れたることくにて、草葉の、露にあらそへり。(『新編日本古典文学全集』)
(23) 次の歌は、『伊勢物語』八十七段の業平の歌や『栄花物語』布引の中将公実の歌に趣を同じくすると思われる。

延喜十三年、齋院御屏風風四帖が歌、仰せによりて 貫之
流くる滝の糸こそ弱からしぬけど乱れて落つる白玉

(『拾遺集』雑上・四四八)

結句の「白玉」について、小町谷照彦校注・訳『新日本古典文学大系 拾遺和歌集』は「白玉、滝の水玉を真珠に見立てたもの」とするが、これも「水晶の数珠」を念頭に詠まれたものと思われる。

後記 本稿は、成城国文学会二〇一八年度大会(二〇一八年十一月十日、於成城大学)に同題で発表した内容に基づく。

(なりた・だいち 成城大学大学院博士課程前期)